

# आयूस: あーゆす

〈発行〉 京都市教短期大学図書館／京都市宇治市檜島町千足80

## ~~~~~ 学びへの入門は普門である ~~~~~

教授・図書館長 照屋敏勝

学びの世界に入る門はあまねく存在する。われわれが学ぶ学問領域は多様であり、それぞれの領域に入る門も多様である。

ひ み つ

谷川俊太郎

あたし してる  
あたしのあと / あなたのあは  
おんなじ あなのよ

ぼく してる  
どせいの いちばん  
おおきな えいせい / たいたん

そのほかに せんせいって  
なにを おしえてくれるかな  
もしかすると すごいひみつ  
そっと おしえてくれるかな

学問とは「問い」を「学ぶ」ことである。どれだけの「問い」を発見できるか、どれだけの「問い」を解決できるか、そのプロセスが重要である。

学びは「宝さがし」のようなものであり、「ひみつのありか」を探すようなものである。そのような探求活動がおもしろくなってくると、学びは楽しくなる。ノーベル賞は「すごいひみつ」を発見した者に与えられる賞である。誰もが発見できる「ひみつ」ではない。

学生時代に日本で最初のノーベル賞を受賞された湯川秀樹先生のお話を聞いたことがある。そのなかで、「私はいつも少数意見でした」という言葉が強く印象に残っている。発見された「ひみつ」は誰も知らないし、その新しい理論を理解できる人はごく少数の者にかざられているからである。

しかし、高度の学問研究だけでなく、われわれの好奇心を刺激する「問い」は日常生活のなかに無数にある。

大学院のころ、遊び感覚でイタリア語を学びはじめたことがある。山手線の高田馬場駅から早稲田大学までは直通の路線バスもあるが、私はだいたい歩いてきた。通りには多くの書店があり、毎月店頭には並ぶ雑誌のなかに「non・no」を発見してイタリア語だと直感した。下宿に帰って早速イタリア語辞典で調べてみた。予想は的中した。しかし、その意味は若い女性向けの誌名には全くふさわしくないものであった。「おじいさん」という意味だったからである。どう考えてもおかしいので、集英社の編集部には電話を入れてきてみた。答えは予想外だった。アイヌ語で「花」を意味する言葉だということだった。翌日、大学図書館のアイヌ語辞典で調べてみた。まちがいがなくアイヌ語の標準語で「花」と確認できた。

学びの出発点は、「問い」と「おどろき」と「批判」である。そして学びは「自己拡大」であり、「自己実現」である。

## 私 と 読 書

助教授 苗 村 久 恵

物心つく頃が戦争だったり、小学校・中学の時代が物資が極度に乏しかった戦後の混乱期だったりしたせいかな、私の子ども時代の読書環境は、すべてにおいて恵まれている今日の子どもたちとは比べることができない。

私が生れ育った安土城址を展望する小さな田舎町には当時図書館と名のつくものはなかったし、本屋といってもいろいろな雑貨類と一緒に雑誌などを並べている店が、一軒あるだけだったような記憶がある。

小学校の頃、たしかに誰がみても本の虫といえるような本好きの子どもは何人かいたが、私はどちらかというと身体を動かして何かやっていることの方が好きで、ドッチボールや鉄棒などに興味があった。

10歳以上も年がひらいていたこともあって、兄が読んでいる本などには関心は持てなかったが、それでも中学の頃、兄の本箱から谷崎潤一郎の小説「細雪」や武者小路実篤の小説「友情」「真理先生」などを取り出して読んでいたことを思い出す。同時に、当時女の子の間に人気のあった吉屋信子の少女小説「あの道この道」「乙女手帳」や、キューリ夫人伝などの伝記物を読みふけたのもこの頃だとおもう。

高校は遠距離通学だったことや進学校の勉強に日々追われていたこともあって、教科書以外の本を手にすることは稀であった。そんな私のことを気づかって兄のところに嫁いできた義姉が、読書を進めてくれたことがあった。私は義姉の言葉に

素直に従わなかったようにおもう。

大学での私は、どちらかという本を読んだりすることよりも実験をしたりして勉強することの方が好きで、卒論も実験したものをまとめる形のものを選んだ。だから、研究テーマを楯にして文献資料を調べたり、関係論文を読み比べたり、研究したい内容を確認するための知的好奇心の旅をしたりすることに慣れるようになったのは、近年のことなのである。

一般的に言って、読書はそれ自体が目的である読書と、読書が何らかの手段である読書という2種類分けられるが、現在の私は後者のほうの形のなかで本に接しているといえる。

今にしておもうことであるが、無目的に自由気ままに読んでいた読書がおもいがけないところで役立っており、自分のかたくなな考えを揉みほぐしてくれたり、思考や感性をひろげたり、深めたりするのに微妙な力となっていたりすることに気づかされるのである。

昨年、亡くなられた作家三浦綾子さんは「本と私」というエッセイの中にこう書いておられる。

「神が私に与えてくれた恵みは数々あるが、読書好きということはその中でも最も大きな恵みのような気がする。(中略) 読書ほど私のイメージを豊かにする世界はなかったような気がする。」と。

三浦さんのこの文を読んだとき、人間にとって読書がもっている大きな意味にあらためて気づいたのであった。

## 私のすすめる3冊

前本学助教授 若井 勲 夫

### 1 『我と汝・対話』

マルティン・ブーバー 植田重雄＝訳；岩波文庫

本学に就任して初めの3年間、一般教育の文学で「我と汝の言葉と文学——対話と沈黙」という主題で講義した基本的な考え方を培った書である。人が人に向かう時、相手の人格・内面との関わりの中で呼びかけ、受け応える対話、心の内なる思いを十分に抑えてこそより深く語る沈黙によって真の一对一の出会いが生まれることを宗教哲学的に説く。

### 2 『小説日本婦道記』『髪かざり』

山本周五郎；新潮文庫

中ごろの5年間、初二の国文学で講読した。武家社会で夫や子の気づかないところに日本女性の美しさと強さが清らかに凛々しく表れる感動的な作品集。「人間の真価は何を為したかではなく、何を為そうとしたかにある」という作者の思念がしみじみと心を打ち、哀れにも厳しく慎ましい女性としての生き方に涙ぐむ学生もあった。

### 3 『注文の多い料理店』『風の又三郎』『銀河鉄道の夜』

宮沢賢治；新潮文庫、角川文庫

最後の3年間、初等教育研究の演習で年に2冊ずつ読み進めた。東北の自然と風土を舞台に愚直で清冽に生き、深くて広い大慈悲の宗教世界に浄化・聖化されていく人間の姿は若き者の心を揺さぶり、人生の示唆ともなった。言葉による表現を基礎に、互いに自らの感性と想像力を研ぎ、読み深め、語り合い、苗床・栽培地を語源とするセミナー（ゼミナール）の稔りを挙げた。

（現京都産業大学助教授）

## A Little Bird, a Bell, and Me (私と小鳥と鈴と)

Misuzu Kaneko  
(金子みすゞ)

Even though I open my arms wide,  
I still can't fly in sky at all.  
But a little bird who can fly,  
Can't run on the ground as fast as me.

私が両手を広げても、  
お空はちっとも飛べないが、  
飛べる小鳥は私のように、  
地面を速くは走れない。

Even though I shake my body  
I still can't make a sound as beautiful as a bell,  
But that ringing bell  
Doesn't know as many songs as me.

私がからだをゆすっても、  
きれいな音は出ないけど、  
あの鳴る鈴は私のように  
たくさんな唄は知らないよ。

A bell, a little bird, and me,  
We're all different and all wonderful.

鈴と、小鳥と、それから私、  
みんなちがって、みんないい。



## 『大地の教え』をよんで

生活文化（人間関係コース）2回生 諸井智恵

私は地球の一角の日本に住んでいます。地球の一角から見る地球は自分から何も知ろうとしなければ狭い地球です。しかし、自分で何かを知ろうとすれば広い地球へと変わると思います。そこで地球のギニア共和国という文化も生活も全く違う国に何か学ぶべきものがあるのではないかと思いこの本を読みはじめました。

ギニアの生活の基本は人間と自然との共存です。周りを見渡せばバオバブの木があり、近くには森があり、生活のほとんどを自然と共に過ごしています。日本の生活の基本は人間と人間のつくったものとの共存です。周りを見渡せばコンクリートの建物やプラスチックなどと生活のほとんどを人間がつくったもので過ごしています。この生活の大きな違いを示す文が本文にあります。それは「人間のつくるものには生命はないが、自然がつくるものにはどんなものでも魂がある。」という文です。この文を日本とギニアの基本の生活におきかえるとギニアでは魂と魂の生活を、日本では魂とももの生活をしているといえると思います。

日本の魂とももの生活は、日本人に人間を除く魂に対する尊厳をもつ心を忘れさせてしまったように思います。たとえば、1個のキャベツをギニアの人は大切にすみずみまでつかうでしょうが、日本人は殺伐とスーパーに並べ置き、時がたつてくれば捨ててしまいます。魂のあることを考えていれば絶対にできない行動を日本人はとっていると思います。もし、日本人がすべての自然のももの魂に対する尊厳をもっていたとしても、それは頭の中だけであって心の中はそうではないと思います。自然のもものすべてに尊厳をもち、感謝していくことはこのものあるいは魂があふれる時代

には難しくなってしまったことなのかもしれません。しかし、この時代をつくってきたのは自然の魂の一つである人間であり、多くの魂の尊厳を奪ったのも自然の魂の一つである人間だということは確かなのです。自然の中の魂の一つが多くの魂の尊厳を文明の進歩によって奪ったことを自認し、思念してこれからの生活についてよく考えていかなければならないと思います。その時に、ギニアの自然に対する考え方は手本となるものだと思います。

文明を進歩させながら自然と人間が共存していくことは可能であったと思います。しかし、日本は高度成長期の時を後先かまわず走りぬけました。そして気づいた今となっては自然と人間の共存からかけはなれてしまいました。でもまだ遅すぎたことにはならないと思います。今からでも、失った自然との生活を取り戻さなければならないと思います。自然に属する人間としての力を探し、自然に属する人間としての役目をはたしていかなければならないと思います。だから、日本は自然と共存するギニアに学ぶべきものがあると思います。ギニアに私達が忘れてしまった大地の教えが今でもあるからです。

著者は言っています。「ギニアに帰ると、いつも、ああ、ぼくは旅に出ていたんだなあをつくづく感じる。」と。この言葉は著者の故郷がギニアであるからだけではないと思います。便利な文明社会よりも、温かい自然との共存の暮らしのほうがよいという意見が含まれているのだと思います。

サンコン、オスマン・ユーラ著『大地の教え』

（講談社）